一、修母致子説

後漢期では、漢朝の徳を火と考える説が光武帝によって支持・顕彰され、大いに流行した(1)。特に讖緯は、劉氏が堯の後裔であり(堯後)、堯と同じく火徳を有すること(火徳)に関して、様々な瑞祥を並べ立てて、漢朝の正統性を強力に裏付けた。更に、それらに加えて、孔子が赤徳(火徳)の王朝である漢の制度として聖典『春秋』を制作した(孔為赤制)という説をも唱えた。

孔為赤制説は、聖人孔子の権威によって漢家の天下を裏付け、漢王朝が他の王朝と一線を画す存在であることを意味する。つまり、『春秋』を始めとする儒教経典が行われ続ける限り漢朝が存続する、という普遍性を唱えることが可能となり、火徳・堯後を補完する働きを有する(2)。この説に先立って、『春秋公羊伝』では孔子が後世の聖王のために『春秋』を制作したと述べ(3)、また、『春秋繁露』では『春秋』制作を受命改制と見なす(4)。こうした公羊説の孔子素王説の構図を継承しつつ、火徳漢朝の正統論に変化させたのが孔為赤制説であり、それを讖緯が取り入れたのであろう。

こういった讖緯説がもてはやされる中で、賈逵は『左伝』の明文のみによって漢の堯後・火徳を証明、つまり讖緯の主張と同じことを証明できることを示した。更に、立説者は不明ながら、やはり『左伝』の明文によって、「修母致子」(五行の「火」に当たる徳が修められた場合、その瑞祥として「火」の子に当たる「土」の属性を持つものが出現する)という説が唱えられた。筆者はこの修母致子説を、左伝学者が孔為赤制を証明するために、様々な五行説を組み合わせて作り上げた主張と考える。つまり、左氏学独自の論理・明証によって孔為赤制を示すことで、讖緯やそれを利用する公羊学に対抗したのではなかろうか。

以下、この修母致子説の内容について、この説が形成された背景やその後の展開について考察する。

讖緯の火徳堯後説・孔為赤制説

讖緯は哀帝・平帝の頃に発すと言われ(5)、また光武帝期に校訂がなされたのであるから(6)、大まかには前漢末から後漢初頃に形成されたと考えられる。そして、讖緯がこの時期に果たした大きな役割が、漢朝の正統性を、新しい理論によって支持することであった。

漢王朝を復興した光武帝は、讖緯に傾倒し、大いに流行させた人物としても知られている。兄伯升が健在であった頃から「劉秀當爲天子」という讖文を耳にし(7)、即位に当たっては「四七之際、火爲主」という『赤伏符』が届けられ(8)、讖緯を意識しながら天下を取った。また、即位の後も讖緯を天下に宣布し、讖緯を批判する学者を叱責・冷遇した。そして、讖緯の流行は光武帝一代のみには留まらず、以後の皇帝も讖緯を重んじ、讖緯に基づいて礼制の変更が図られたり、讖緯に沿って経説が整理されたりした(9)。

このように讖緯が歴代皇帝に支持され続け、盛んに用いられ続けた一つの原因は、讖緯の中に、漢の火徳・堯後を述べる明文があったことである(10)。そして、讖緯の文言は雑然としていて内容が矛盾することもあったが(11)、漢朝の徳運に関しては、火徳で統一されている。これは、火徳説を主張するために意図的に造作されたものであることと(12)、たとえ土徳説等があったとしてもそれらが校定の際に削除されたであろうことを示している(13)。このような過程を経て形成されたものであるから、火徳堯後を説く際に最も使いやすい典拠であり、旧来の経書・経説よりも遥かに、当時の正統論の要望

を満たした。

孔為赤制説についても、やはり同様に、讖緯によって明文が提供されている。例えば、『尚書考霊耀』や『春秋感精符』には「孔子爲赤制、故作春秋」、「墨孔生、爲赤制」等の文言が見える(14)。これらは、水徳の孔子が(15)、火徳の漢朝のために『春秋』を制作した、つまり孔子が漢朝を予見し、その正統性を認めていたということを主張している。

以上のように、後漢期に於いて、火徳・堯後・孔為赤制の三者が一体となって漢朝の正統論を構成し、讖緯がそれと結びついた。当時、讖緯の文辞が漢王朝の正統を裏付けるために用いられたのだが、実際には、讖緯の内容が正しいということ自体が、そこに予言されている漢王朝の実在によって説得力を持ったと云うべきであろう。すなわち、讖緯が聖典と見なされて流行したのは、その内容が、当時「真実」(もしくは「真実であるべきこと」)と見なされていた漢朝正統論に合致していた、つまり「正しい」ものであったからこそだったのだ。

王莽のための記述が削除されたように、讖緯であれば即ち聖典であったのではなく、「真実」に合致しなければ、讖緯の文辞と雖も聖典の地位を剥奪されたのである。まして、讖緯でも経書でもない経説であれば、なおさら、当時の「真実」に合致させなければ、その「正しさ」を公認させることは困難だったはずである。

公羊学者による獲麟解釈

鄭玄が「公羊善於讖」と述べているように(16)、公羊学と讖緯説とは相性が良い(17)。孔為赤制も、そもそもは公羊の孔子素王説から発展したものであり、『公羊伝』(哀公十四年)に見える「制春秋之義、以俟後聖」という文言と親和する。更に、何休『春秋公羊解詁』では、哀公十四年の獲麟の記事に対する注で、讖緯を多用して孔為赤制説を説いている。

得麟之後、天下血書魯端門曰、趨作法、孔聖沒、周姫亡、彗東出、秦政起、胡破術、書記散、孔不絶。子夏明日往視之、血書飛爲赤鳥、化爲白書、署曰演孔圖。中有作圖、制法之状。孔子仰推天命、俯察時變、却觀未来、豫鮮無窮、知漢當繼大亂之後。故作撥亂之法、以授之。

獲麟の後、天から血で書かれた文字が魯の端門に降って来て、そこには「法を速やかに制定せよ。まもなく聖人孔丘は没し、姫姓周室は滅ぶ。故に彗星が東に現れた(18)。秦王政が勃興し、胡亥が帝王の道を破壊する。聖典は散り散りになるが、孔子の教えは断絶しない」と書いてあった。子夏が翌日行って見ると、血書は空に舞い上がって赤鳥となり、変化して白い文字となり、「演孔図」という題名が書かれていた(19)。その中には図があり、法制について描かれていた。孔子は天を仰いで命運を察し、地を眺めて時の変化を悟り、更に未来を見て遥か先のことを予知し、漢室が大乱の後に王者を継ぐことを知った。そこで混乱を治める法を著し(20)、授けたのである。

夫子素案圖録、知庶姓劉季、當代周。見薪采者獲麟、知為其出。何者。麟者木精、薪采者庶人、燃火之意。此赤帝、将代周、居其位。故麟、爲薪采者所執。西狩獲之者、從東方、王於西也。東卯、西金象也。言獲者、兵戈文也。言、漢姓卯金刀、以兵得天下。

夫子はもともと図讖を読んで、庶人の劉季が周に代わることを知っていた(21)。そして、薪取りが麟を獲たのを見て、その前兆であることを悟

った。何故かというと、次の通りである。麟は木の精であり(22)、薪取りは庶人であり、火を燃やすという含意がある。つまり、赤帝が周に代わって王位に即こうとしているのである。そこで、麟が薪取りに捕らえられたのだ。西へ狩りに行って獲たというのは、東から興隆して西で王になるということである。また、東は十二支では卯であり、西は五行では金を示す。獲というのは、兵器を意味する字である。つまり、漢の姓が「卯金刀」(「劉」)であり、兵事によって天下を得ることを意味する。

これをまとめれば、「麟＝木精＝周」「薪采＝[庶民・火]＝漢」であり、孔子は図讖によって「西狩獲麟」を周漢交代の前兆であると悟り、来たるべき漢朝のために『春秋』を著したということになる。

このような獲麟解釈は何休の独創だったのではなく、遅くとも後漢中期には公羊学者たちによって唱えられていた。以下、許慎『五経異義』に引かれた議論を示す。

公羊説、哀十四年獲麟、此受命之瑞、周亡失天下之異。

公羊学の説に「哀公十四年の獲麟は、受命の瑞祥であるが、周が天下を失うことについての異変でもある」と言う。(23)

公羊説云、麟者木精、一角赤目、爲火候。

公羊学の説に「麟は木精である。しかし、一角で目が赤いため、火の徴でもある」と言う。(24)

「麟＝木精＝周」と考え、獲麟が火徳劉氏の受命と周の滅亡を示していると解釈する主旨は、何注と全く同じである。また、何休のように「薪采＝火＝漢」とはしていないが、麟の目が赤いという根拠を挙げることで、やはり獲麟に火徳の瑞祥という意味を付与している。やや強引ながらも、公羊学はこのように讖緯と密接に結び付きながら、経典の文言によって孔為赤制説を導き出し、漢朝の正統性(及び『公羊伝』が漢朝の正統性を導き出せること)を主張したのである。

修母致子説の内容と根拠

このような公羊説に対して、左氏学側は、次のような説を唱えた。

左氏説、麟是中央、軒轅大角獸。孔子脩春秋者、禮脩以致其子、故麟來、爲孔子瑞。

左氏学の説では「麟は中央に属す、軒轅大角の獸である。孔子が『春秋』を修めたので、礼が修められることでその子を至らせ、そのために麟が現れ、孔子についての瑞祥をなした」と言う。(25)

説左氏者云、麟生於火、而遊於土、中央軒轅大角之獸。孔子作春秋、春秋者禮也。脩火德以致其子、故麟來而爲孔子瑞也。

『左伝』を説く者は、「麟は火から生まれて、土に移る、中央軒轅大角の獸である。孔子が『春秋』を作り、『春秋』は礼に当たる。火徳を修めてその子を至らせ、そのために麟が現れ、孔子についての瑞祥をなしたのである」と言う。(26)

五常の礼は、五行では火に当たる。また、方位の中央は、五行の土に当たる。つまり、この左氏説は、「『春秋』編纂(礼、火)」が「麟(中央土)」を至らせた、という論である。これがつまり、五行相生の原理で母に当たる火が修

められるとその子に当たる土が現れるという、修母致子説である。

『春秋』編纂（＝火）
←（火生土）
麟の出現（＝土）

この左氏説は、明言こそしていないが、麟を土に配当しながらも、「修母致子」という複雑な論法を経ることで『春秋』編纂を火徳に関連付けており、やはり孔為赤制説への意識が見られる。

もし麟を土に配当しつつ『春秋』への応徴と見なすだけであれば、『春秋』を土に配当すれば済むことである(27)。あるいは、陳欽のように麟・『春秋』を両方とも金に配当するという手段もある(28)。いずれも、帝王の徳に対して同類の事物が応じるという、シンプルな瑞祥説で処理でき、修母致子のようなややこしい説明をせずに済む。それにも拘らず、そのようにしなかったのは、『春秋』を火徳漢朝に結び付け、公羊・讖緯の説に対抗する意図があったからであろう。

なお、親に当たるものを修めることで子に当たる応徴が至るという修母致子の論理は、『左伝』に明証を求めることができる。孔穎達等によると、修母致子の根拠は『左氏伝』昭公二十九年の「水官弃矣、故龍不生得（水官が修められていないので、故に龍が生きたまま得られなくなった）」に見出されるという(29)。

龍は左氏説では木に配当される（後述）。そして、水官が修められていないために龍が至らなくなったのであれば、裏を返せば、龍が至るのは水官が修められたが故である。従って、この『左氏伝』の記述から、水官（水＝母）が修められることで龍（木＝子）が至るという論理、すなわち修母致子の構図を導き出すことができる。

このように、修母致子の理論的根拠は、『左伝』の文言に得ることができる。立論の根拠が得られるのみならず、『左伝』を明証とすることで、左氏学ならではの独自性を主張することも可能となったのである。

賈逵との関係について

誰が修母致子説を作ったのかについては、資料が不足しているため、明らかではない。『春秋左伝正義』（哀公十四年疏）は、この説を唱えた者として「賈逵・服虔・潁容」を挙げる。

賈逵・服虔・潁容等皆以爲、孔子自衛反魯、考正禮樂、脩春秋、約以周禮。三年文成、致麟。麟感而至。取龍爲水物、故以爲脩母致子之應。

賈逵・服虔・潁容等は、いずれも「孔子が衛より魯に帰り、礼・楽を研究して正し、『春秋』を編纂し、周の礼に則ってまとめた。三年にして完成し、そして麟を至らせた。麟が感応して現れたのである」と言う。（『左伝』昭公二十九年の）「龍爲水物」に基づいて、修母致子の応じ方であると考えたのである。

このうち、服虔・潁容は『五経異義』よりも後の人物であるので、修母致子説を立てたのではなく、継承したに過ぎないと考えられる。また、残る賈逵についても、孔疏の「取龍爲水物、故以爲脩母致子之應」という説明が、賈逵の説に元々含まれていたのかが不明であるため（服虔・潁容の頃になって付加された内容かもしれない）、この資料では、修母致子説の提唱者であるか否かを確定することはできない。

ただ、賈逵が修母致子説に非常に親和する学説を唱えていたことは確認でき、修母致子説の成立と何らかの関係を有していたと考えられる。以下、このことについて考察する。

賈逵の春秋説と修母致子説との間には、以下の類似点を見出せる。

・『春秋』編纂→獲麟」という順序が共通する。『史記』『春秋繁露』『説苑』そして讖緯はいずれも、獲麟の後に『春秋』編纂がなされたと考えている(30)。後の杜預も、「獲麟→『春秋』編纂」と考えており、麟が『春秋』完成に対する応徴と見なす説を非難している(31)。一方、賈逵は「三年文成、致麟」としており、『春秋』の完成が麟を至らせたと考える。この時間的順序は、修母致子説の前提と謂えよう。

・賈逵は、『春秋』制作を「立素王之法」と見なす(32)。『春秋』を素王の法とするのは公羊学の説であるが、修母致子説の前提でもある。『春秋』を次の王者のための法と見なすことによって、獲麟を漢朝と結び付ける解釈が成り立つ。

・賈逵は、火徳・堯後という漢王朝の正統を裏付ける事柄について、讖緯を用いず、『左氏伝』一書によって十分な根拠が提供されることを主張した(後述)。修母致子説も、また、『左氏伝』昭公二十九年の文を明証とし、讖緯を用いずに、孔為赤制説という漢朝正統論に整合する解釈を導き出している(そして、このような修母致子説によって、賈逵の火徳説が補完され、左氏説の漢朝正統論が完成されたとも謂える)。

これらのことから、修母致子説は、賈逵もしくは賈逵と関係の深い者による説と考えられる。また、賈逵の弟子許慎の手に成る『五経異義』に収録されていることから、賈逵・許慎と同時期、後漢中期頃に唱えられたと推測できる。

賈逵は、後漢前半期の人である。父の賈徽は劉歆から『左伝』『国語』『周礼』を学び、他にも『古文尚書』や毛詩を修めた。そして、その英才教育を受けた賈逵も、やはり古文学者となった。白虎観会議に参加した際に章帝に認められ、さらにその後の上奏が評価されて、『左伝』を教授することになった。また、『左伝』・『国語』の注釈等、多くの著作をなし、『左伝』や『毛詩』・『周礼』といった古文学の興隆に寄与した(33)。

范曄によれば、賈逵がこのように活躍し、『左伝』を顕彰し得たのは、他の左氏学者よりも「能附會文致」したからであるという。例えば、賈逵は建初元年の上奏文で、次のように述べている。

五經家皆無以證圖讖明劉氏爲堯後者、而左氏獨有明文。五經家皆言顓頊代黄帝、而堯不得爲火德。左氏以爲少昊代黄帝、即圖讖所謂帝宣也。如令堯不得爲火、則漢不得爲赤。其所發明、補益實多。

五経の学では、劉氏が堯の後であるという、讖緯が明らかにしていることを証明することができませんが、『左氏伝』にはその明文がございます。五経の学ではみな顓頊が黄帝に代わって即位したと言いますが、それでは堯が火徳となることができません。『左氏伝』では少昊が黄帝に代わったとしており、これは讖緯で「帝宣」と云う人物のことです。もし堯が火徳となりえなかったら、漢も火徳ではありえなくなります。このように、『左氏伝』が明らかにし、補うことは誠に多いのです。(34)

ここでは、『左氏伝』によって、火徳説・堯後説の根拠が得られることを主張している。まず、『左氏伝』の記述を繋ぎ合わせれば「帝堯陶唐氏――→御龍氏――→豕韋氏――→唐杜氏――→范氏――→劉氏」という系譜となり(35)、帝堯から劉氏に至る血縁関係を示すことができることを述べる。そして、五行相生の王朝交代モデルで堯と漢の二者を火徳と見なすためには、黄帝の次の代に少昊氏の存在が必要であるが(前章第二節を参照)、それも『左氏伝』に明文が見出せると言う(36)。そして、賈逵はこの上奏により、『左氏伝』及び自らの地位を高めるということに成功している。

ただし、これを以って直ちに賈逵を讖緯に立脚・傾倒した人間と断ずるべきではない。この上奏文は、『左氏伝』が讖緯に一致する、という口調で宣伝しているが、実際には、堯後・火徳の根拠が『左氏伝』一書に全て見出せることを述べている。つまり、王朝公認の正統観である堯後説・火徳説に明証を提供することで讖緯は興隆したが、『左氏伝』も同じ役割を果たし得るということである。極端に言えば、讖緯に取って代わる余地をも残している。

賈逵は、讖緯の内容の矛盾を述べ立てたこともあったと言う(37)。暦論でも、讖緯の中で賛同できる文言を引くことはあるものの、現在の事実と乖離する部分に対しては迎合しない態度を顕わにしている(38)。

ここに引いた上奏文でも、『左氏伝』が讖緯と合致することよりも、『左氏伝』のみで堯後・火徳を導き出せることを強調しており、それによって『左氏伝』の正しさを示すことに眼目があったと考えられる。即ち、賈逵にとっては、堯後・火徳が「真実」(もしくは「真実であるべきこと」)であり、それが第一に優先される。その上で、讖緯との符合を示す文言を散りばめつつ、堯後・火徳に適う『左伝』の優秀さを主張したのである。

賈逵が『左伝』によって堯後・火徳を導き出したように、修母致子説も『左伝』の明文を根拠として、孔為赤制と符合する獲麟解釈を実現させた。そして、これらはいずれも、当時に於いて「真実」とされた漢朝正統論を優先した経説であった。

また、修母致子説は、『春秋』編纂の後に獲麟が起きたとし、麟を五行の土に配当する点で、木や火に配当する讖緯とは対立している。これは、天文等の分野で四霊獣について一般に考えられていた配当を反映しており(後述)、讖緯の文言を絶対視しない賈逵の姿勢と共通する。

以上のことから、筆者は、賈逵もしくは賈逵と同時期で関係の深い左氏学者が、この修母致子説を立てたと考える。

五霊獣について

鄒衍以来の五徳終始説では、瑞祥とそれを引き起こした人物・業績は、五行ではいずれも同じ行に配当されるという「当方来応」が、一般的な認識であった。文帝・武帝期の徳運論争も、水徳や土徳の瑞祥の有無が、大きな論点であった。また、前引の公羊説が、『公羊伝』の明文によって麟を「木精」と言いながら、そこに「赤目」という出所不明の論拠を加えることで麟を「火候」にしたのも、「当方来応」によって『春秋』を赤徳漢朝に結びつけるためであった。

このような「当方来応」に従った場合、麟を土にするのであれば、その出現を引き起こした『春秋』編纂も土に配当することになる。しかし、それでは孔為赤制説と矛盾し、公羊説に対抗できない。そこで『左伝』昭公二十九年の文等を使いながらひねり出されたのが、修母致子説であった。

それならば、始めから麟を火に配当させれば良かったのではなかろうか。そもそも、何故、麟を土に配当するのだろうか。

麟の配当について、やはり『五経異義』が議論している。

公羊説、麟木精。左氏説、麟中央、軒轅大角之獸。陳欽説、麟是西方毛蟲。許慎謹按、禮運云、麟鳳龜龍、謂之四靈。龍、東方也。虎、西方也。鳳、南方也。龜、北方也。麟、中央也。

公羊の学説に「麟は木精である」と言う。左氏の学説では「麟は中央で、軒轅大角の獸である」と言う。また陳欽は「麟は西方の毛の動物にあたる」と言う。私許慎は僭越ながら以下のように考える。礼運に「麟・鳳・亀・龍を〝四霊〟と言う」とあることを踏まえるに、龍は東方で、虎は西方、鳳は南方、亀は北方、麟は中央にあたる。(39)

これによれば、左氏学の説では、麟を中央土に配当していたという。ただ、ここで許慎が『礼記』礼運の「麟鳳龜龍、謂之四靈」を引いておいて、龍・虎・鳳・亀・麟の五つを挙げるのは、論理としては少々おかしい(40)。そして、礼運に加えて、月令や『大戴礼記』の記載を踏まえれば、陳欽のように麟を西方金に配当するのが、経学の理屈として完結しているだろう(41)。

しかし、四霊獸について考えると、麟ではなく虎を西方金獸と見なす説は、古来有力である。例えば、天文では、西方の参宿や西宮全体の精を白虎とする(42)。また、『礼記』曲礼は、行軍の際に掲げる旌旗について、「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎」と言っている(南を前にした場合、北が玄武、東が青龍、西が白虎となる)。更に、墳墓の吉凶を巡る論でも、『呉越春秋』では白虎を金精の化身とし(43)、少し時代は下るが管輅も玄武や朱雀などと共に白虎について言及する(44)。

礼運篇で挙げられていないにも関わらず、許慎が虎を四霊に加えて西方に配当することで、麟を中央に配する左氏説に賛同したのは、当時の四霊獸についてのこうした考え方を反映させたのであろう。すなわち、龍・鳳・虎・亀をそれぞれ東(木)・南(火)・西(金)・北(水)に当てるという、天文などに於いて採られている配当を踏まえた上で、麟・鳳・亀・龍を「四霊」とする礼運篇を解釈したために、西(金)に虎が当てられる一方で麟が余り、それを中央(土)に当てることになったのであろう(45)。

すなわち、左氏学は、西(金)に虎を当てる従来の四霊説を損なわず、かつ『春秋』編纂を火徳漢朝と関連付ける孔為赤制説とも符合させるために、『春秋』(火)──→麟(土)」という獲麟解釈(修母致子説)を編み出したのであろう。

その後の展開

以上考察したように、修母致子説は、天文等の四霊獸説を保ちつつ礼運の「四霊」とも符合させ、かつ漢朝の火徳を『春秋』(特に『左伝』)によって裏付けるという試みであった。このように様々な要素と関連して生み出されたこの論理は、その後もまた、様々な説と関連し、展開して行った。

『毛詩正義』は、『毛氏詁訓伝』の「麟信而應禮」(周南 麟之趾注)、「騶虞、義獸也。白虎黒文、不食生物。有至信之徳、則應之」(召南 騶虞注)、「鳳皇靈鳥、仁瑞也」(大雅 生民之什 巻阿注)について、修母致子説に基づく解釈を示している。

言信而應礼、則與左氏説同、以爲脩母致子也……(中略)……騶虞傳云、有至信之徳則應之、是與左傳説同也。

「(麟が)信にして礼に応ず」と言うのは、左氏説と同じく、修母致子であると考えているのである……(中略)……「騶虞」の毛伝に「至信の徳有れば則ち之に応ず」と言うのは、左氏説と同じである。(46)

言仁瑞者、五行傳及左氏説皆云、貌恭體仁則鳳皇翔、言行仁德而致此瑞。毛此意、用臣之仁以致南方鳳……(中略)……以用臣所致者、皆脩母致子應也。

「(鳳凰が)仁の瑞である」と言うのは、『五行伝』及び左氏の学説で「容貌が恭しく仁を行えば、鳳凰が翔ぶ」と云うもので、つまり仁徳を行えばその瑞祥を引き起こすということである。毛伝のこの言葉は、臣下の用い方が仁であれば南方に当たる鳳を呼び寄せるということである……(中略)……臣下を用いることで引き起こされるのは、いずれも修母致子に則った応瑞である(47)。(48)

すなわち、「礼(火)──→麟(土)」「信(土)──→騶虞(白虎、金)」「恭・仁(木)──→鳳凰(火)」という構図で、毛伝の字句を解釈しているのである。

このように毛伝解釈に修母致子が用いられるようになった正確な時期は、不明である。修母致子の説が見られる最初の文献である『五経異義』には騶虞についての議論もあり、毛伝の説が支持されているが、ここでは修母致子説は紹介されていない(49)。修母致子に基づく毛伝解釈は、許慎当時ではまだ行われていなかったのであろう。

許慎よりやや下り、後漢末の蔡邕になると、修母致子説によって毛伝を解釈する例が見出せる。班固「典引」に「擾緇文皓質於郊」という句があり(50)、ここでの「緇文皓質(黒い模様に白い下地の動物)」というのは、毛伝「騶虞、義獣也。白虎黒文」に基づいて騶虞のことを記述しているのだろう。そして、これに対して蔡邕は、「思睿信立、則白虎擾」と注釈している。五事の思、五常の信はいずれも五行の土に当たり、それが五行の金に当たる白虎(騶虞)をなつかせるという。つまりこれは、修母致子に基づいている。このことから、蔡邕の頃までには、『毛詩正義』に見えるような、修母致子に基づいて毛伝を解釈する言説が現れていたのであろう。

蔡邕による「典引」注には、更に、「貌恭體仁、則鳳凰來儀」「視明禮脩、則麒麟來應」「聽德知正、則黄龍見」と説かれ、つまり「貌・仁(木)──→鳳凰(火)」「視・礼(火)──→麒麟(土)」「聽・知(水)──→龍(木)」という内容が見える。上述のように、麒麟・龍の修母致子は左氏の学説であり、蔡邕はこれを毛伝の騶虞・鳳凰・麒麟の解釈に応用している。このように、許慎から蔡邕に至るまでの間に、修母致子は毛伝解釈にも用いられるようになり、毛伝の明文によって麟・龍・白虎・鳳凰について述べるにまで至ったのである。

そして、同じく蔡邕の手に成る『月令章句』では、これに「神亀」(「玄武」)を加え、次のように述べる。

天官五獸、左蒼龍、大辰之貌……(中略)……亦龍生於水、遊於木……(中略)……修其母致其子、五行之情也。故貌恭體仁、則鳳凰來儀。言從和義、則神龜至。視明禮修、則麒麟臻。智聽故事、則黄龍見。思叡信立、則白虎擾。

天官の五獸のうち、左は蒼龍であり、東宮大辰の貌である……(中略)……また龍は水より生じ、木に移る……(中略)……母に当たるものを修めれば子に当たるものを至らせるというのは、五行の性質である。そのために、容貌が恭しく仁を身につければ、鳳凰が至る。言葉が従われ義に適えば、神亀が至る。視が明らかで礼が修められれば、麒麟が至る。故事をよく知り、よく聴けば、黄龍が現れる。思慮が賢く信が確立していれば、白虎がなつく。(51)

ここでは、天官の五霊獣全てについての修母致子を説いており、五常五事と五霊獣を全て備えた修母致子説を完成している。また、「貌恭」「言従」等は『尚書』洪範や『洪範五行伝』の字句を念頭に置いており、つまり、『尚書』『毛詩』『春秋』の三経にまたがる五行説と謂えるだろう。

そして、蔡邕よりも更に後、服虔『春秋左氏伝解誼』による獲麟注にも、修母致子説が見られる。

夫子以哀十一年自衛反魯、而作春秋、約之以禮、故有麟應而至。

夫子は哀公十一年に衛から魯に戻って『春秋』を作った。その際に、礼に則ってまとめたので、麟が応じて現れた。(52)

麟中央土獸、土爲信。信、禮之子。脩其母致其子。視明禮脩而麟至、思睿信立而白虎優、言從乂成而神龜在沼、聽聡知正則名川出龍、貌恭性仁則鳳皇來儀。

麟は中央土の獣であり、土は五常では信に配当する。信は礼の子に当たる。母に当たるものを修めれば子に当たるものを至らせる。故に、視が明らかで礼が修められれば麟が至り、思慮が賢く信が確立していれば白虎がなつき、言葉が従われ義が成就すれば神亀が沼に現れ、よく聴くことができ知の働きが正しければ名川が龍を出し、貌が恭しく人となりが仁であれば鳳が出現する。(53)

前者は賈逵による説とほぼ同じである。また、後者は蔡邕『月令章句』の文言をかなり利用している。

ただし、服虔は獲麟の記事について、以下のようにも言う。

言西者、有意於西。明夫子有立言、立言之位在西方、故著於西也。

「西」と言っているのは、西という方角に特別な意味があるからである。夫子は(『春秋』編纂によって)言を立てたが、言を立てるというのは方位では西方に当たるので、その故に麟が西に現れた、ということを示しているのだ。(54)

これは陳欽や鄭玄の「立言之説」を取り込んだものと考えられる(55)。修母致子説と立言之説とは、いずれも左伝学者の説ではあるが、学統を異にしており(56)、内容としても対立するものだった。その両者を服虔は、麟自体を土に配当しておいて、「西狩獲麟」「西狩於大野」の「西」という字に基づいて獲麟に金を配当することによって、解釈の衝突を避けつつ取り込んだのである。

しかし、こうなると、『春秋』編纂は、火だけではなく、金にも配当されるということになる。ここには、『春秋』を火徳漢へ結び付けようとする意識は、もはや存在しない。服虔は、礼(火)が修まったからその子に当たる信(土)の獣を至らせたという先師の説を祖述してはいるが、それはもはや孔為赤制を説明するための手段というよりは、単に五行の理法の一種としてしか認識されていないのではなかろうか。

皮錫瑞は、「漢經學所以盛、即謂聖經為漢制作、故得人主尊崇」と言う。これは、後漢の経学に対する的確な指摘と謂えよう。経学は王朝のためにマジカルな権威付けを用意し、王朝はそのような経学を顕彰した。

修母致子説は、賈逵・許慎の頃（白虎観会議が催され、『五経異義』が執筆される等、左氏学・公羊学が激しく主導権を争っていた時代）に作り出された五行説であった。天文に於ける四霊に礼運の四霊を符合させて五霊とした上で、また漢朝を火徳とする新しい五徳終始説にうまく対応し（58）、『左伝』の地位を向上させるために、この修母致子説が作り出された。ここでは、系統を異にする複数の五行説が、相互に関連付けられている。

後漢末期、蔡邕や服虔の頃になると、『毛氏詁訓伝』の文言とも関連付けられ、更に内容を充実させた。それに伴い、孔為赤制説としての性格は薄くなり、単に五行の一つの原理という程度の意識に落ち着く。漢朝が衰退していたという時代背景に加え、『左伝』の地位が向上しており、もはや漢朝正統論を主張する必要は無かったためかもしれない。後漢が滅びた後に杜預が著した『春秋経伝集解』では、麟を五霊の一つに数えるという説は引き継がれたものの、『春秋』編纂が麟を至らせたという説は明確に否定され、麟の出現・捕獲は「非其時、虚其應」であるとする（『春秋経伝集解』序）。つまり、漢朝の前兆としての意味は、微塵も無い。

漢朝の衰退とともに孔為赤制説は滅びるが、一方、修母致子の構造は、単なる五行の理法として残存する。以下は、『五行大義』論配気味の説である。

養生經云、肝色青、宜食醎、稲米・牛肉・棗。心色赤、宜食酢[酸]（59）、犬肉・李。肺色白、宜食甘、麥・羊肉・杏。脾色黄、宜食苦、大豆・豕肉・粟。腎色黒、宜食辛、黍・雞肉。此五食、皆以所生能養其子也。

『黄帝養生経』では「肝臓の色は青なので、塩味、米・牛肉・棗を食べると良い。心臓の色は赤なので、酸味、犬肉・李を食べると良い。肺の色は白なので、甘味、麦・羊肉・杏を食べると良い。脾臓の色は黄色なので、苦味、大豆・豚肉・粟を食べると良い。腎臓の色は黒なので、辛味、黍・鶏・肉を食べると良い」と言う。これら五食は、いずれも五行に分類するとその子に当たる臓器を養うものである。

五行説の思考が分野を越えて共有され、本来の立説の意図と関係しない形で活用されるようになった、一つの例と謂えるだろう。

※本節は、拙稿「修母致子説の成立とその変容」（『中国――社会と文化』第二十六号、二〇一一年）を大幅に改稿したものである。